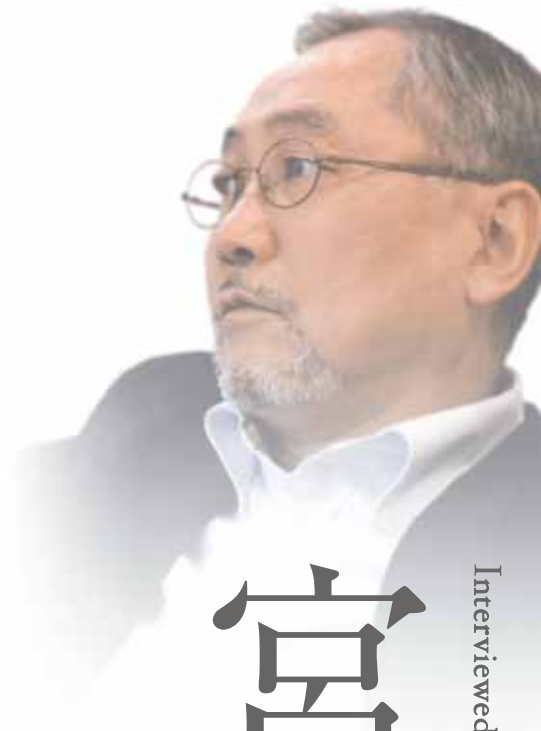


Interviewed to Teru Miyamoto concerning "Yushun"

宮本輝

「優駿」を語る



優駿を執筆しようと思われたきっかけは何ですか？

「優駿」を書き出したのは僕が33歳か34歳のときですが、それまで競馬小説といいますが、賭博の世界を描いたギャンブル小説がほとんどでした。サラブレッドの世界とはもつと奥の深いもので、馬券とかギャンブルというものを離れて、サラブレッドという馬の不思議さ、競馬の世界の神秘性みたいなものを文学にすることはできないか、と思って第一章を書き出しました。また小学5年生のときに、父親から買ってもらった「名馬風の王」という本が非常に深く心に残っていたんです。これは競走馬の祖先のうちの二頭であるゴドルフィンアラビアンという馬の生涯を書いた小説なんです。この本が、三頭の非常に優れた馬が交配を重ね続けることで、サラブレッドというものが次第に出来上がっていくという知識を得ました。これも書き出した動機のひとつです。

物語のタイトルとなった「優駿」というのは中央競馬会が昔から出している月刊誌のタイトルなんです。自分が書くこととしていたものに「優駿」という言葉くらいピッタリくるものがなかったのですから、それを使いしました。

ですね。

サラブレッドという経済動物と、それに関わる馬主、調教師、厩務員、騎手、生産牧場、育成牧場とかいろんな相関関係があって、もちろんここには利潤が生まれま

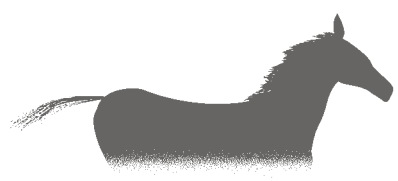
執筆開始当初の構想はどのようなものでしたか？

主人公となる仔馬が生まれるところから始めようとは思っていましたが、どんな牧場にしようかさえも決まっていなかった。とにかく書き出して、もう後はレーヌの馬なりつてやっつてすよね。最後ダービーで終わろうとも思ってたんです。だから最後にオラシオンをダービーに勝たすのが負かすのかっていうところで迷いました。勝たすをあまりにも小説的で、あまりにもドラマチックで。という負けさすのね、ここまで書いてきてそれはないだろう。そうすると「おしたのジョー」みたいに勝ったか負けたかわからないような終わり方にするのかなど、も最後までどうしたらいいのかわり出なかつたですね。ダービーのスタートが切られて走り出

したところを書きながら、どうしようかなと思っただけ。最後の直線に入ってもまだ迷っていましたよ。難しいところですよ。読んでいる人はたぶん勝つだろうなあと思うんですけど、そう思いながら書くとな、やっぱり負けさすかなとか、鼻差で2着しようかなとかね、いろいろ考えますよ。

「オラシオン」という名前はどうやってつけられたのですか？

「オラシオン」という名前は、仔馬が生まれたときはまだ決めてなかったです。非常に悩みましたね。覚えやすいものでしかも何か意味がある名前がよかった。それで英語やフランス語などいろんな辞書を引つ張り出してきました。偶然スペイン語にオラシオンという言葉があったんです。「祈り」という意味だったんですけれど、これはピッタリだあとと思っただけ。但し現実の競馬の世界に、オラシオンという名前の馬がいたら使えませんから。それを調べるのが大変でした。当時まだパソコンなんかありませんし、簡単に調べられない。競馬界の知ってる人に、かつて日本にオラシオンという馬がいたか聞いて回りましたね。苦労のかけあつて、日本にはいないことがわかりました。しかし、それもしも仮にヨーロッパにいたとかいってても、それはもう仕方ない。そこで調べようがないですから、それでオラシオンとつけたんですよ。



宮本先生は馬主にもなられたそうですが、そのいきさつを教えてください。

書きはじめの前からかなりの取材が必要だということにわかっていました。でも実際書き出すと自分が思っていた以上のことをしなくてはならなくなりました。その第1が、自分が馬主にならなければどうにも書けないということがわかったということです。えらい目にあいましたね。

競馬の世界を取り巻くいろいろな話を聞きました。が、みさん表面上のことしか話していただけだったんで。もちろんこれは当然のことでしょうが、「競馬のこと」を小説に書きたらいいで、「なんと」とかという小説家が取材に来るらしいで」と言われても調教師としても牧場にしてみても「ちか」というと迷惑なんです。所詮上っ面しか話せませんしね。騎手何人かと話をしてもね、兄弟子、弟弟子の関係とかもあつて言えないことがあるんです。相手には下手すると、そこで何か不正なことが行われているといった「誤解」を生じようということを書かれないかという不安もあるでしょうしね。こちらからは、そんなことは一切書きませんと言つても、向こうは警戒しますから。そこか、結局これではスポーツ新聞を読んでいるのと変わらないじゃないか、これはもう？馬主になるしかないなと思いましたが、この世界を知るための一つの残された道は、馬主になることだ、馬主には本当のことを言えらるうと。そういう訳で馬主になったんです。

そうなる、自分の馬が走り出すと、自分の馬に乗つてくれた騎手に電話をかけて、どうしてあの直線に急に失速したのか、というような細部まで聞けますよね。しかしたとえ馬主といっても結局はなかなか本当のことを言わないもんです。ですので、調教師のちよつと書いた言葉を抑揚とか、騎手のちよつとした含み笑いだとかをこちらが読み取って解釈するしかありませんでした。そういうながら書いていったんです。

馬を自分ひとりで二頭買わないで、小説家風情がそんなこと出来ませんので、初めはお知り合いの馬主さん3、4人でお金を出し合つて、そんなに高くない馬を3、4人で持とうという形ではじめたんです。が、なかなかそれだとい馬というは買えないんです。すよね。あの当時から、ちよつとしかりした仔馬だとやつぱり2000万〜3000万円しましたからね。ちよつとこの頃に社台ファームの吉田善哉さんが、20人で馬を持つという共同馬主制度をつくりあげましたね。それをある人から紹介されて、それだったら僕も馬を持てると思ひ共同馬主になりました。それなら牧場にもいけるし、実際日本の馬産のトップを走っている社台ファーム

の吉田さんともお話できるしね。いずれにせよ20人の馬主のうちのひとりになるわけですから。

馬主になられたその後のエピソードを教えてください。

時間的には、第二章、第三章を書き出した頃に馬主になりました。とにかく馬主になつてわかつたことは、馬のことにはわかんないというんです。

競馬の評論家はみんな馬の能力と、心臓だとか肺臓だとか、内臓の強さ、筋肉の強さなどの身体的な能力のことばかり言います。しかし馬は結局心で走るんですよ。評論家たちは、その精神力といいますが、その馬の精神力というところまでは言及してないんです。やつぱりその馬の精神力は、実際毎日管理している調教師、厩務員だとか乗った騎手だけがわかることだ、他の人間にはわからないです。

しかし、次のレースは間違つても2着ははずさない、調教師が自信を持ってそう言ったレースがあつたんですが、実際は10着にも入らない。これはどういうことだと聞くと、やつぱり結局のところは調教師にも騎手にもわからないんです。でも調教師も騎手もそんな言葉ではごまかせないですから、ちよつと4コーナーで外の馬に当たられたとか、口調が悪かった、というよないろいろな言い方をするんです。結局は馬が走りたくなかつた、気がいらなかつただけということの方が多いです。

だんだんとそういうところが見えきました。馬は生き物ですからね。馬にそれぞれ癖がありますしね。人間には計り知れないものがあります。そんななか、僕に僕には高いお参りを使つていたのか、という気持ちでした。

僕が馬主になつて、馬主になつたといつても弱小馬主です。一応作家としての目でも自分の馬が走るのを見せました。競馬では一番最初のデビュー、新馬戦といふのがあります。新馬戦で2着以内にこない馬はあまり大成しないです。これは幼稚園児が運動会で走るよなもんです。一回もまだレースしたことがない馬なんです。それは玉石混交です。将来横綱になる馬なんです。ついに一回も勝ちに消えていく馬も混じつてるわけですよ。そこでヨーイドンで走るわけですよ。少々騎手が下手な乗り方をしようが、体調が悪かろうが、仕上がりが悪かろうが、やつぱり強い馬が勝ちますよ。梅権は双葉より芳し、というのが新馬戦ではつきりとわかるんです。だからどんなに馬物入りで、予想馬二重丸が山ほど付くような馬でも、新馬戦で5着や6着で、次は2着に来て、次くらいに1着で、その後トントン

とクラシックを制覇したという馬はあんまりいないです。だから新馬戦というのは大事なんです。

最近僕は大いけいレースでも一切馬券は買わないです。しかし、買わないけど新馬戦だけは見ます。新馬戦でいい勝ち方をした馬だけは頭に入れておくんです。やつぱりそのうちの何頭かはクラシックレースに出てきますね。

ご自分の馬が走るときはやはり心配されましたか？

それはもう心配ですよ。だけどそれは、ベットというわけではないですから、経済動物ですからね。しかし馬を走らせる身としては、怪我せんと一周回つて来てくれたらええわ、と思うわけですよ。前の日までは絶対勝つてよ、とか思つてるんですけど、いやいやもう3着以内でええ、パドックを回りだしますとね、5着でええと、本馬場入場になると、いやいや8着でええ、それでゲートに入りかけると、もうええもうええ、怪我せんように、一番後ろでええから回つて来いとね。そうなりますよ。だって足をボキと折つたらそれでおしまいですから。安産死処分ですからね。だから馬の病気のこともよく勉強しましたよ。どうして足の骨を一本折つたくらいで殺さなくてはいけなんですか。あれはもう人間みたいに直らないんです。人間は体でかい人でも100キロでしょう。どんなに小さい馬でも400キロくらいありますから、自分の体を支えるまでは到底回復しないんです。

馬がレースに出て行くのにもいろいろな難関があるんですよ。繊細な動物ですからね。いっぺん嫌なことがすり込まれると、もうそれが抜けません。ですから生まれて初めて鞍を乗せるといふときには、ものすごく慎重にしないといけないんです。馬が嫌がつているときは無理矢理鞍を乗せると、鞍を乗せること自体を拒否するようになる。そうすると人間を乗せることも拒否するようになる。どんなにいい種馬とどんなにいい母馬との間で、未来を囁きされて生まれても、競走馬としてデビューするまでの間に、もうそこで既に淘汰されていくんです。

とにかく話になつてならなくらいお金がかかりますよ。一頭の優れたサラブレッドの周りに、いろいろな世界のプロフェッショナルたちがたくさん絡んでくるわけですから。



1983年春 北海道早来社台ファームにて「優駿」取材



社台ファームの吉田善哉氏との交流で 印象深いエピソードを教えてください。

馬主になったことをきっかけに吉田さんと知り合いになりました。何回か北海道の社台ファームの牧場に行きました。その都度、吉田さんが今までずっと培ってきた競馬に対する知識を、折に折に話して聞かされた。吉田さんに話しているのを、横で聞いていましたね。そういうふうなことが、吉田さんの言葉じゃなくても、少し僕らの形に変えたもので、それを他の人にしゃべらすというふうな形で「優駿」の中に言葉として出てきますね。非常に多くのものを吉田さんから学びました。

僕は今までいろんな人と会ってきたけれど、「この人は頭のいい人だな」と舌をまくような人は5人もいないです。みんなそれぞれ頭のいい方なんですけど、勉強がよくてできるというわけではなくて、はっきりとした人はちょっと抜き出ると頭がいいなと感ぜさせる人という意味では、吉田さんは二本の指に入ります。彼は馬が生まれた瞬間に、走るか走らないかというのを見極めてからか。それほどの馬相眼というか、眼力を持ってた人ですよ。生まれたての子馬がよろよろ立ち上がって、その瞬間に一瞬で見分けるという、眼力があるということ、は、やっぱり人間に対してもそうですよ。

初めて合った瞬間に、その人の本質をどこか見抜くようなところがあるんです。馬相眼つまり人間相眼みたいなものですね。これは馬の方が人間よりもっと難しいですよ。人間はしゃべりますし、自分の感情を言葉にしますから。馬はしゃべりませんし、姿かたち、あるいは表情しぐさ、それから競馬の場合は血統ですね、そういうものを含めてぱっと瞬で判断するわけですよ。そういうことを、もうすつとやってきた人ですから。ひとりの人間を見たときに、その瞬間、吉田さんにとっては一匹の仔馬なんです。こいつは口ではいいこと言っているけど、腹の中黒いぞとかね。ぱつとわかるんです。

またあの当時、必ず日本の競馬界はこうなりますよとおっしゃったことが、全部その通りになりましたね。例えば、やがて社台ファームの生産馬が日本競馬の賞金の70パーセントを頂戴するとおっしゃったことがありました。それってすごい金額ですよ。ついに数年前に社台ファームはその言葉を実現しましたね。

当時からそれは大言壮語ですよ。だけどそれが大言壮語に聞こえなかったんです。この人は本当にやるな、この人がこう言ったんだからきっとこうなるだろう、という風にはね。吉田さんがじくなられて、その後息子さんが現在の社台ファームをつくってこられました。そしてすごいことは、お父さんが社台ファームは必ずこうなると言ったことは全て実現してきたということですよ。

ことです。跡を継いだ息子さんたちも立派です。吉田さんとは「優駿」を書くためにお知り合いになって、交流が出来たんですけれど、日本の競馬界のここまでの発展、というのは吉田善哉なくしては語れないですね。

社台ファームのような大きな牧場や吉田さんのような方は、物語りの中で出すつもりでした。トカイファームというのが非常に小さな牧場ですけど、その対極というものを表現したかったんです。ですが、物語の中に直接には登場させられなかったんですよ。出すとしても悪役にならざるを得ないんですよ。大資本と弱小個人商店の闘いみたいなもので。そうすると社台ファームは小説としてはどうしても悪役という図式になるんです。そういう風に吉田さんを小説の中で使いたくなくかつたんです。今回の吉永ファームのような登場の仕方あれがもうぎりぎりでしょうね。

取材の際、仔馬の出産風景は ご覧になりましたか。

仔馬の出産風景は見ました。ただ、馬はすごく繊細な生き物ですから、出産するときに自分の知らない顔があると、すごく興奮したりするので、牧場の人は嫌がるんです。ですから僕は物陰に隠れて、母馬からは見えなくて、そこでチョットのぞく感じで見ましたね。仔馬が顔から出てきてくれると、もうその瞬間に周りを取り囲んでいける獣医や牧場の人たちもほっと息がすすよ。馬はどっちかの足から出てくるのが一番危んです。足だけ出て胴体ひっかかってしまっても出てこない。帝王切開なんて出来ませんから、足からでてくると殺すしかないんですよ。

僕は殺す現場も立ち見しました。仔馬の方を殺すんですけど、そのやり方はとても残酷でした。大変なやり方をしないと母馬が死にますから。

印象深い登場人物はいらっしゃいますか。

やっぱり秘書の多田時雄ですね。小説の最後は多田の視点で終わりますから。最初はあんな人物が出てくるというのには、まったく想定してませんでした。物語が和具半八郎の視点に変わったときに、多田という秘書が突然出てきたんです。最初多田という秘書を出した瞬間は、あそこまでの役割を最後まで果たしていくということとはまったく考えていませんでした。僕の中で多田というのは、映画でいうと通行人みたいな役割だったんです。それがだんだんあの物語の影の部分のけん引役みたいな

いになっていきました。多田という人物を得たというところが、優駿という小説の成功のひとつの要因となったかなと思います。計算して出てきた人物じゃないんですよ。短編小説を書く場合は大体の設計図がありますけれども、長編の場合は、どこで誰がどういう風に出てくるか、というのわかりません。道ですれ違っただけの男が、あくる日になったらばつと振り返って喋りだす、ということもありますよ。その人物が結局その長編小説のカギを握ってくるということもあるんですよ。

心に残っている馬の名前を教えてください。

僕がサラリーマンをしていた頃、まだまだ小説家にならうなんて夢にも考えてなかった頃なんですけど、一頭の競走馬がいました。その馬は仔馬のときに顔を蹴られて、顔が歪んでしまっただけです。フサトロコウサンという馬で、普通なら顔の骨が歪むくらい蹴られると死ぬんですけど、なんとかが育ったんですよ。それがミラクルバードのモデルですよ。今で言うところの1000万クラス、1000万円下クラスで行ったりきたりして、3-4勝した馬です。日本の競馬史上に名を残す馬ではないですけど、僕はフサトロコウサンにはなだかすく思入れがありますね。

「優駿」が宮本先生に与えた影響を 教えてください。

僕は「泥の河」で太宰治賞、「蜚川」で芥川龍之介賞で出発しました。これはどちらも純文学と呼ばれている世界ですよ。僕は小説に純も不純もないと思っただけです。純文学とか大衆小説とかを意識するということ、は嫌だったんですよ。ところが「優駿」が候補になったというところを知らずしてました。そのときにふつと、「泥の河」「蜚川」で作品が世に出たから10年と少し、「優駿」で吉川英治文学賞をいただいた、まあ要するに純文学の賞も大衆文学とわかれていた分野の賞も頂戴したんだ。これは何か、「宮本」、もう純も不純も大衆も中間小説もどうでもいいじゃないか、おまえの好きなものを書いていけよ」と言ってくれたのかなと、そういう風に自分で考えたんです。それからちょっと自由になりましたね。日本の文壇のジャンルというものを抜けて、好きなものを、つまり何書いても文学だよ、という考えにぱつと転換できましたね。そういう大きい、自分の心構えとしてのエポックのような作品だったと思います。



1988年頃 社台ファーム謝辞会会場にて



1987年 イギリスニューマーケットにて
有名種牡馬厩舎前

